

2015 年度人間福祉学部報

■社会福祉学科

多忙な日々を送る社会福祉学部一同だが、“Be-ware the barrenness of a busy life”（「ただ忙しいだけの不毛な人生には気をつけよ」）とのソクラテスの言に従い、まず、数字を通じて今季の達成度を振り返りたい。

「99」。夏の実習——今年度は99名の学生が参加し（ソーシャルワーク64名、精神保健福祉9名、医療ソーシャルワーク5名、福祉インターンシップ2名、スクールソーシャルワーク1名、福祉社会フィールドワーク18名）、教員、実習支援室助手が一丸となって指導に当たった。

「199」。オープンキャンパス——高校生144名、保護者55名の合計199名が来場。模擬講義は、「福祉の仕事はおもしろい」（石川久展教授）、および「超高齢社会～危機？それとも機会？」（陳）の2本で、小西加保留教授と梓川一准教授による社会福祉士の仕事に関するビデオ上映、松岡克尚ゼミによるゼミの活動紹介パネルがあった。

「100」。1回生の合宿——ラーニングアシスタント13名と教員3名の指導の下、10月初旬に100名の学生が参加。グループワークを通して福祉の基礎的な学びを体験した。

「24,510」。海外より5名の来客——数字は各来賓の渡航時に加算されたマイル合計数。7月にハワイ大学社会福祉教員のキム・ブンジュン先生（4,134マイル、石川久展教授招聘）、8月に大阪・博愛社の創設期を支えた林歌子の子孫であるバージニア州・ヴァルドスタ大学の菅野花恵先生（6,516マイル、室田保夫教授招聘）、11月にメリーランド大学カウンセリングセンター、シニア・スーパーバイザーの大谷彰先生（6,895マイル、池埜聡教授招聘）、そして、アデルファイ大学福祉学部の副学部長ブラッドリー・ゾーディコフ先生、および同学部のクリッサン・ニュランスキー先生（6,965マイル、陳招聘）の来日があった。

次に、本学部教員の活動詳細例を挙げる。

今井小の実教授は特別研究期間中ではあるものの、学生指導は続行中である。「研究演習Ⅰ」は

神学部生を含む女性のみの少人数クラスだが、それ故にまとまりがあり、議論も活発で、他学部学生との認識の差異に気付く刺激的な機会となっている。また、「研究演習Ⅱ」では、留学生の存在を受け、各学生がユニークな研究テーマを選択し、知的好奇心の満たされる場となっており、両授業共に「学生による学生の時間」が有意義に展開されている。

一方、芝野松次郎教授は、博士課程前期課程「ソーシャルワーク EBP 研究」で、昨年度のアメリカ留学の結実『ソーシャルワーク実践モデル D&D—プラグマティック EBP のための M-D&D』をテキストとして使用。EBP および EBP に寄与する実践理論開発に関する議論を図ったとの報告である。また、担当初年度となった「福祉社会演習」では、学生が「福祉マインドを持つ市民として、地域に貢献する人材」となることを目指し、自ら集めた情報を元に、地域福祉問題を話し合い、市民として解決にどう貢献できるか発表を行った。

7種のゼミや講義を担当し、さらに実習支援室の室長でもある松岡克尚教授は、ソーシャルワークにおけるネットワーク概念、障害者ソーシャルワーク構築、インペアメント文化に関する研究に理論、実証双方から尽力を注ぐ一方、四国や西宮の精神障害者支援の NPO 法人運営、行政における障害者差別解消条例や手話言語条例制定に関する活動、兵庫県精神保健福祉士協会の運営などにも参与している。

医療ソーシャルワーク分野への貢献経歴が長い小西加保留教授は、高齢化する HIV 陽性者への地域生活支援活動を中心に、医師、NPO 法人、福祉関係者らと共に、厚生労働科研の協力者として、医療福祉施設の建設や在宅支援の実践に関する研究活動を継続している。HIV/AIDS ソーシャルワークが日本で展開されて約 30 年が経過し、HIV 医療は飛躍的に進歩したが、心理社会的な課題は山積している。その解決への糸口として、同教授は来年、「エイズとソーシャルワーク」（1997 年）の大幅な刷新版を出版する。また、ソ

ーシャルワークにおける「アドボカシー」の学際的研究の延長として、成年後見制度など「意思決定支援」にソーシャルワークが貢献できる内容についても探究は続く。その他、高齢者問題に関心が集まるこの時代に、学生がソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを可能な限り明確に描けるような授業も目指している。

福祉における「組織開発」が専門の安田美予子教授は、企業活動や経営学を福祉に結びつける授業や研究を遂行。組織行動論、組織論などの分野を参考に、企業経営やNPO経営に関心が高まりつつある「組織開発」の手法に焦点を当てている。人間関係、リーダーシップ、理念浸透、ビジョン構築、組織文化といったヒューマンプロセスに係わる事象への対応手法を、社会福祉施設や事業所などの組織レベルに導入・展開することを目指しており、その手法の質的調査法は、授業・実習指導にも活かしている。

池埜聡教授も新しい研究分野を手掛ける一人である。ストレス軽減や疼痛コントロール、人間関係の改善などに影響を与えるとして欧米で受け入れられてきた「マインドフルネス」を、日本のソーシャルワークにも取り入れることが同教授の目標である。社会福祉士のストレス軽減や少年院での更生保護、スポーツ選手のメンタルトレーニングへの導入など、その実践方法の普及と実証研究に奔走中である。

国内外で多忙な副学部長の大和三重教授は、本学が日本社会福祉教育学校連盟理事校に再選されたことを受け、国際ソーシャルワーク教育学校連盟(IASSW)の理事会とセミナーに出席するため、7月に南米コロンビアを訪問。メデジン市地域プロジェクトも視察し、セミナー共催校アンティオキア大学の教員との会合では、カリキュラム

やフィールドワークに関する意見交換を行った。

続く8月には、日韓健康教育シンポジウム(本学開催)で、2015年度の介護保険法改正を中心に、地域包括ケアシステムの構築と費用負担の公平化に関して発表。10月にチェンマイで開催された国際老年・老年医療学会(IAGG Asia/Oceania 2015)では、地域包括支援センター職員の職務満足度と就労継続意思について発表を行うとともに、バンコクではAPASWEにも参加し、「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」の地域版策定に関するアジア・太平洋地域の進捗状況に関する情報収集を行った。

一方、学内では西宮市社会福祉協議会などの協力を得て、他学部生を含めた220名の学生を対象に「認知症サポーター養成講座」を実施。認知症の基礎知識を習得し、認知症高齢者への理解を促すことが目的だったが、予想以上の反響があり、今後の継続を図りたいとの報告である。

ピア(仲間)として難病・ガン患者と共に歩むことをテーマとする梓川一准教授は、大阪府立母子保健総合医療センターで、重度の難病・障害のある子供に対する支援活動を実施。また、身体・知的・精神障害者の社会的自立支援のため、奈良県で(福)ぶろぼのを設立したりするなど、研究や教育に連動した実践・活動に取り組んでいる。

最後に、筆者(陳)は、IAGG Asia/Oceania 2015でシンポジウム討議者を務め、11月にはアメリカ老年学学会(Gerontological Society of America)で高齢者ボランティア事業の組織能力尺度作りの日米比較について発表した。また、同学会のフェロー審査に通過し、理事として表彰を受けた。日米の懸け橋となれるよう邁進したいものである。

(陳 礼美)

■社会起業学科

人間福祉学部社会起業学科が開設され、8年目を迎えました。本年度は74名の1年生が新たに加わり、2年生72名、3年生83名、4年生105名、総勢334名でスタートしました。そして、大熊省三准教授が仲間に加わったことで、本学科の教育・研究に厚みと活気がさらに増しました。

人間福祉学部が開設された2008年度以降、社会起業学科ではさまざまな取り組みを行ってきました。反省点や課題を残すこととなった取り組みもありましたが、それらを教職員のみならず、時には学生とも共有しながら改善することにより、魅力的な取り組みとなるよう努めてきました。本年度も学科の特色を反映した取り組みを数多く実施しましたので、その概要を下記に示します。

①社会起業学科新入生歓迎プログラム「これが社起やDAY 2015」

社会起業学科では、新入生歓迎プログラムとして、「これが社起やDAY」を毎年4月に実施しています。これは、「社会起業に関する学びと学生間交流」、「学科への求心力の向上」を目的としており、「学び」の部分では、授業紹介やゲストスピーカーの講演等を行い、「交流」の部分では、共に身体を動かしたり、食事をしたりして交流を深めています。今年度の概要は下記の通りです。

- ・日 程：2015年4月18日（土）
- ・会 場：関西学院大学 G 号館および学生会館 新館 1F OFF TIME
- ・参加者：1年生55名、学生スタッフ11名（2年生）
- ・内 容：礼拝、社会起業学科卒業生による講演、授業紹介（実践教育関連）、レクリエーション、懇親会
- ・ゲスト：川西澄信氏（1期生）、渡邊未来氏（2期生）

②英語短期留学

社会起業学科の独自プログラムである英語短期留学（カナダ・クイーンズ大学 School of English）に、2年生12名、3年生1名の合計13名が参加しました。8月8日、参加者全員がプログラ

ムを修了し、無事帰国しました。今年度は2名がクイーンズ大学での成績優秀者として表彰される等、自らの学びにおいて、大きな自信、収穫を得ることができた研修になったと思います。なお、「参加学生の声」を人間福祉学部のHPにて掲載しています（http://www.kwansei.ac.jp/s_hws/s_hws_m_001082.html）。また、本プログラム参加者の池田瞳さん（社会起業学科2年生）が、クイーンズ大学の Student Ambassador（学生大使）に抜擢されました。池田さんの役割は、関学生に対し、自身がクイーンズ大学で経験したことを共有し、クイーンズ大学の School of English に興味がある学生のサポートをすること等です。池田さんは「今後は関学からクイーンズ大学、特に School of English に行きたいと考えている学生さんの手助けが少しでもできたら嬉しい。そして今回の経験を糧に、誰かのために何かできるように様々なことに挑戦していきたい」と今後の抱負を語っています（HPより。http://www.kwansei.ac.jp/s_hws/news/2015/news_20150929_011415.html）。

③社会起業インターンシップ

1) 国内インターンシップ

今年度は4名の学生が国内インターンシップに取り組みました。国内のNPO法人において、3年生の夏季休暇中に3週間の日程で行いました。インターンシップ先は下記の通りです。

- ・認定NPO法人 宝塚NPOセンター
- ・認定NPO法人 アルテピアッツァびばい
- ・特定非営利活動法人 日本ファンドレイジング協会
- ・特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会

2) 海外インターンシップ

今年度は2名の学生が海外インターンシップに取り組みました。海外での社会貢献活動について学ぶこと、海外での実践力を高めること、異文化の環境のなかで働く能力を養うこと、社会の問題と課題を把握し取り組む能力を高めること、を目標に、夏季休暇中に6週間のインターンシップを行いました。インターンシップ先は下記の通りです。

- Northernmpton University (イギリス)
- Animal Education & Control, Hamilton City Council (ニュージーランド)

④社会起業フィールドワーク

1) 国内フィールドワーク

今年度は45名の学生が国内フィールドワークに取り組みました。“現場から学ぶ社会起業の課題と取り組み”として、街に出て、社会的課題に直面している当事者の方や問題解決に向けて取り組みを行っている社会起業家にお会いしました。その中で、問題解決に取り組む姿勢を学び、人と会い、質問しながらお話を聞き、それをまとめて整理し、他人に伝える技術を獲得することを目的に、団体を取材させていただき、その様子を示すビデオを作成しました。インターンシップ先は下記の通りです。

- NPO 法人 Homedoor
- NPO 法人 暮らしづくりネットワーク北芝
- NPO 法人 コリア NGO センター
- 大阪子どもの貧困アクショングループ
- NPO 法人 トッカビ

2) 海外フィールドワーク

今年度は11名の学生が海外フィールドワークに取り組みました。“現場で学ぶ国際協力”をテーマに、タイを訪れました。国内フィールドワークと同様、団体を取材させていただき、ビデオを作成しました。インターンシップ先は下記の通りです。

- Friends International/Peuan Peuan (タイ)
- ミラー財団 (タイ)

⑤実践教育報告会

人間福祉学部各学科の実践教育を報告する場として、実践教育報告会が12月12日(土)に開催されました(G号館201号、202号教室)。本学科からも、フィールドワーク、インターンシップ等の実践教育科目に取り組んだ学生が、ポスター発表形式で報告を行いました。3学科合同開催であるため、他学科の学生との意見交換や情報共有も活発に行うことができ、自らの関心領域を広げることにつながったと思われます。

⑥オープンキャンパスでの社会起業学科イベント

8月2日(日)～3日(月)の日程で、関西学院大学上ヶ原キャンパスのオープンキャンパスが開催されました。本学科からは、「実践教育プログラム紹介」と題した、現役学生による社会起業学科実践教育プログラムの紹介を行いました。国内・海外インターンシップ、国内・海外フィールドワーク、社会起業プラクティス等、学科の特徴的な学びを学生たちが映像やスライドを用いて紹介してくれました。2日間で230名の参加があり、大盛況に終わりました。

⑦2年生の秋の学年コンパ

社会起業学科では、毎年2年生を対象に、「研究演習Ⅰ」の選択に向けた懇親会を実施しています。教員とじかに話ができるいい機会であり、学生たちから好評を得ている取り組みです。本年度は、9月30日(水)に「Spoon Café」で開催し、学生、教員合わせて55名ほどが有意義な時間を過ごしました。

(林 直也)

■人間科学科

人間科学科は、「こころ」と「身体」の両面から、人間のあり方と自己実現への理解を深めることを目的に設置されています。例えば、「こころ系」では、死生学、ターミナルケア論、老年学、悲嘆学、子ども学などの科目が、「身体系」では、健康科学、運動生理学、スポーツ栄養学などの科目が用意されています。スポーツ指導・支援者をはじめ身体や心を病む人や悲しみの中にある人に寄り添える人材を育成しています。早いもので、学部学科が設置されてから8年目を迎えました。本年度は94名が新入生として加わり、2年生108名、3年生114名、4年生120名、総勢436名でのスタートとなりました。2015年3月には四期生として、98名の学生が卒業し、一般企業（金融・保険、製造、卸売など）、公務員、教員など、様々な世界に巣立っていきました。就職を希望する学生の就職決定者の割合（就職率）は、人間福祉学部全体で98.3%と依然好調でした。

人間科学科に入学して最初に受講するのが基礎ゼミです。大学とはどういうところかを理解するとともに、レポートの書き方やプレゼンテーションの仕方など、これからの大学での学びに不可欠な基本的なスキルを身に着けます。2012年度からは、ゼミのクラスを増やし、1クラス当りの学生を10名程度に減らすことにより、教員との関わりの密度を濃くしました。

基礎ゼミと並んで1年生では、「人間科学入門」が春学期の必修科目となっています。「佐藤君の一生」というテーマで、「こころ系」と「身体系」の教員がオムニバス形式で、それぞれの専門分野の講義を行いました。このことで、学生たちは学科の理念をしっかりと理解するとともに、人間科学の基礎を学びました。

2012年度からは「人間科学実習入門」も始まりました。これは、1年生秋学期に開講される必修科目で、人間科学入門で学んだ基本的な事柄をより具体的に掘り下げて学ぶものです。人間科学実習入門では教室での学びに加え、合宿を行うのが大きな特徴となっています。淡路島にある国立淡路青少年交流の家で10月17日、18日の日程で行いました。17日は大学の正門前からバス3

台に分乗して淡路島に向かいました。11時頃には宿舎に到着し、早速体育館で合宿のオリエンテーションとアイスブレイク。昼食をはさんで、午後はまず「身体系」の授業から始まりました。各自心拍計を装着して、決められた数か所のポイントで心拍数をチェックしながら、往復7kmをグループ単位で歩きました。コースは、砂浜あり、登り坂ありでかなり険しいものでしたが、グループのメンバーがお互いに励まし助け合いながら最後まで頑張りました。夕食後、夜は「こころ系」の授業です。「コンセンサスーわたしの考え・あなたの考え」と題して、1グループ6人ずつに分かれ、ボランティアをテーマとした事例に対し、自身の考えを表明したうえで、最終的にグループの合意（コンセンサス）を形成するプロセスを体験しました。異なる価値観や意見に耳を傾け、徹底的に話し合い納得することが、合意形成そのものより大切なことを学ぶとともに、ボランティアの本来の意味にも触れる機会を得ることができました。

翌日の午前は再び「身体系の科目」でした。前日に行った心拍数計測などの結果を踏まえ、運動負荷が身体にどのような影響をもたらすのかについて体系的な講義が行われました。次いで、「こころ系科目」です。「人間の生き方や幸せ」をテーマに、「きつねのおきゃくさま」（あまんきみこ作）という物語を題材に、主人公の背景にある思いについて、「自分はどのように捉え、なぜそう思うのか」についてグループで話し合いました。そして、「この物語から何を学べるか」などについて討議しました。これからの人間科学科での学びや大学生活における自分自身の関心や動機を広げる機会につながればと願っています。

私たちは常日頃、雑事に追われて、自分の「こころ」や「からだ」について改めて見つめ直すことはあまりないのではないのでしょうか。しかし、参加者の一人ひとりが、合宿を通じて自分について新しい気づきを体験しました。

人間科学は、机の上の学習（座学）だけでは限界があります。実践現場に身を置き、これまで学んできた理論を実践に統合化することが大切です。このため、希望者には「人間科学フィールドワーク」が用意されています。従来は4年生が対

象となっていました。今年度から3年生も受講できるようになりました。今年度は、フィールドワークに参加した学生は3名と少なかったのが残念ですが、ホスピスや総合スポーツクラブ、アスレティック・トレーニングの場などで学びを深めました。

フィールドワークを円滑かつ効果的に行うには、現場での実習に備えて必要な基礎知識を学んでおくことが大切です。このため、実習の前段階として2年生を対象に「人間科学フィールドワーク入門」が開講されています。今年度は20名の学生が履修を登録しました。フィールドワーク入門には、実践現場の見学実習が含まれており、学生たちはそれぞれ、積極的に実践現場の方々との意見交換を行いました。本科目を履修した学生が少しでも多く、3年生の人間科学フィールドワークに臨んでくれることを願っています。

なお、人間科学フィールドワークや人間科学フィールドワーク入門では、参加学生による体験の報告会が開催されています。フィールドワーク先や見学実習での気づきや学びを他の学生や大学院生、フィールドワーク先でお世話になった方々の前でプレゼンテーションを行っています。

G号館2階にある資料室には、「人間科学科の100冊」というコーナーがあります。人間科学科の教員それぞれの一押しを図書が陳列されています。卒業時には完読をめざして、ぜひ目を通してほしいと思います。

人間科学科では、学生の充実した学びを実現するため、教員全員が知恵をしまり、工夫を凝らしながら、カリキュラムや学習環境の拡充に努めています。

(才村 純)

■言語教育

・必修英語科目

人間福祉学部では、必修外国語科目として英語講読と英語表現を設けています。学生の習熟度と第2外国語の選択科目に対応するため、クラス数は15となっています。流暢さの向上と素早く的確に情報を読み取る能力を養うために英語講読で行っている多読課題は、副読本の拡充と管理の適正化をはかり、学年により図書館蔵置のものと学部資料室蔵置のものを使い分けています。専門教育へのスムーズな橋渡しを図るために人間福祉学部の社会福祉・社会起業・人間科学3学科と英語科の教員が分担執筆したテキスト（『Living in Society: From People to Persons』2011年1月、南雲堂）を2年次の英語講読で使用してきましたが、2016年度からは内容の刷新と時代のニーズへの対応をはかって新たに編纂された教科書（『English for Human Welfare Studies』2016年1月、朝日出版社）を使用します。題材の提供にはやはり本学部の教員があたりました。また1年次の英語表現でも、本学部の英語教育方針を反映したシラバスに沿う授業進行をはかるため、本学部英語教員が作成した教科書（『English Beams』2016年1月、金星堂）が出来上がり、2016年度より使用します。

より英語力を高めたい学生には、必修英語科目に替えて受講できる科目が別途言語教育センターから用意されており、一定の要件を満たせば1年生春学期、または1年生秋学期から開講されるコースを履修することができます。なおこれらのコースを受講する場合、後述の人間福祉学部が提供する英語コミュニケーションを第2言語として選択することはできません。外国人留学生には日本語Iを必修科目として開講しています。

・第2言語科目

選択必修の第2言語としては、人間福祉学部が用意する英語コミュニケーション、日本手話、および言語教育センターが用意するスペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、朝鮮語のうちの1言語を1・2年次4学期間履修することを義務付けています。原則として途中で言語を変更すること

は認めていません。なお外国人留学生用選択科目として基礎英語を用意しています。以下に①英語コミュニケーション、②日本手話、③スペイン語についての概略を紹介します。

①英語コミュニケーションの授業では英語による異文化間コミュニケーション能力育成と多文化共生意識の涵養をはかり、これまでに多方面のゲストスピーカーを招いた授業や交換留学生との交流を取り入れた授業も行ってきました。今年度も次のようなプログラムを行うことができました。

まずニューヨーク市在住の高校生 Thomas Schmitt 君がボランティアの T. A. として6月末より7月中旬までの間、約30時間（20コマ）の英語コミュニケーション授業に参加してくれました。授業の中ではアメリカ合衆国およびニューヨーク市での高等教育について、プレゼンテーションを行いました。受講生よりも年少でありながら内容・形式の完成度の高さがおおいに本学学生を刺激し、英語でのコミュニケーション能力向上へのモチベーションを高めてくれました。また通常授業での発音指導、プレゼンテーション準備、その他授業にかかわる教学一般の補助にも積極的に携わってくれました。

同じく6月には米国アリゾナ州の Saguaro High School 他4高校より生徒18名と教員（代表：Ms. Lisa Berkson）を招き、学生生徒の主体的学習活動を通して異文化間の障壁を乗り越えてコミュニケーションを進める主旨の交流授業を実施しました（写真参照）。

②本学部の設置趣旨に沿い実施されている日本手話では、学年の約 $\frac{1}{3}$ にあたる約100名の学生が受講しています。

手話実技の練習には学生一人当たり一定の空間が必要となるため、1クラス15名に限っています。週2コマのうち1コマをネイティブ・サイナーの講師による実技学習に充て、もう1コマを聴者講師による「ろう文化概論」「日本手話概論」「読解」に充てています。

実技学習は、手話で手話を教えるダイレクトメソッドを採用し、幼児の言語習得原理に基づくナチュラルアプローチ法を中心に進めています。授

業では音声は禁止され、音声日本語の干渉を受けない環境の下で手話習得を促進し、同時にろう者の基本的会話のルールを学んでいきます。「ろう文化概論」では、ろう者のゲストスピーカーを招いていますが、その様子を録画し、資料室で閲覧可能にしています。授業で学んだ日本手話を授業外でも活用できる機会として、ろう者を招いての交流会、有志による施設見学なども実施しています。

2年次の秋には、グループによる日本手話やろう文化に関する「日本手話研究発表会」を開催し、音声日本語でプレゼンする際の手話通訳の利用方法を学ぶ機会を設けています。

③スペイン語は言語教育研究センターが提供している科目であり、全学共通カリキュラムにより運営されています。スペイン語圏でも特に中南米は、貧困などの多くの社会問題を抱えている点、また近年急速に発展し、今後日本との貿易・交流が見込まれる地域が増加している点など、人間福祉学部の学生が学んでいる事柄を活かせるフィールドであると言えます。また、日本国内にも中南米出身者が多く在住し、スペイン語や近縁のブラジル・ポルトガル語文化への理解が地域社会の福祉を考える上で必須となっています。そのためスペイン語科目の2年間の履修期間が終了するとき

には、自分自身や自分自身を取り巻く事柄を簡単なスペイン語で表現でき、辞書を使えば、本やインターネットなどで自分に必要な情報を得ることができるようになることを学習目標としています。授業は週2回開講されていて、1クラスは日本人教員が主に文法を教え、もう1クラスはネイティブ教員が会話や言語運用の授業を行っています。

人間福祉学部では、例年30名前後の学生がスペイン語を履修しています。最初はなじみある英語とは異なるスペイン語の特性を難しく感じてやる気をなくす学生もいますが、1年目の秋に入ると、複雑な動詞の活用にも慣れてきて、「面白くなってきた」と熱心に勉強し始める学生も少なくありません。授業ではスペイン語で意思伝達や情報収集ができる学生の育成に重点を置いてはいますが、スペイン語圏やスペイン語圏出身者に関する情報を常に与えて、学生たちにとって身近な問題として考えるきっかけづくりができるように努力しています。おかげでスペインへ短期の語学研修に行く学生が毎年数名おり、なかには1年間の留学を果たす学生もいて、スペイン語圏の多様な文化に触れ、人々と交流して意義深い体験をして帰国しています。

(福居誠二)



■チャペル

日時	奨励者	主題
4月8日(水)	嶺重 淑(宗教主事)	チャペル・オリエンテーション①
10日(金)	嶺重 淑(宗教主事)	チャペル・オリエンテーション②
13日(月)	広瀬康夫(吉岡記念館職員)	讃美歌を歌おう①
15日(水)	宗教総部献血実行委員会	春の献血週間を覚えて
17日(金)	広瀬康夫(吉岡記念館職員)	讃美歌を歌おう②
20日(月)	J. メンセンディーク(宗教センター宗教主事)	「狭き門」
22日(水)	安田美予子(社会福祉学科教員)	チャペルへの招き：神様の思い、人間の思い
24日(金)	嶺重 淑(宗教主事)	「地の塩として」
27日(月)	グリークラブ	音楽チャペル
29日(水)	宗教総部	活動報告
5月1日(金)	混声合唱団エゴラド	音楽チャペル
4日(月)	聖歌隊	讃美歌を歌おう③
8日(金)	T. D. ボイル(経済学部宣教師)	音楽チャペル
11日(月)	大石健一(茨木春日丘教会牧師)	「強いられた道」
12日(火)	大学合同チャペル第1日	於)中央講堂
13日(水)	大学合同チャペル第2日	於)中央講堂
15日(金)	上ヶ原ハピタット	活動報告
18日(月)	小西砂千夫(社会起業学科教員)	出会い①
20日(水)	嶺重 淑(宗教主事)	出会い②
22日(金)	ゴスペルクワイア(POV)	音楽チャペル
25日(月)	山 泰幸(人間科学科教員)	出会い③
27日(水)	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
29日(金)	石川久展(社会福祉学科教員)	出会い④
6月1日(月)	文 禎顯(『単立』北鈴蘭台教会牧師)	「光の正体」
3日(水)	宣教師によるチャペル	於)中央講堂
5日(金)	才村 純(人間科学科教員)	出会い⑤
8日(月)	嶺重 淑(宗教主事)	「タラントを活かして」
10日(水)	前橋信和(社会福祉学科教員)	出会い⑥
12日(金)	木原桂二(北山バプテスト教会牧師)	「敵を愛しなさい」
15日(月)	聖歌隊	音楽チャペル
17日(水)	嶺重 淑(宗教主事)	賛美歌練習
19日(金)	宗教総部献血実行委員会	夏の献血週間を覚えて
22日(月)	小西加保留(社会福祉学科教員)	出会い⑦
24日(水)	嶺重 淑(宗教主事)	「ニーチェと運命愛」
26日(金)	パロックアンサンブル	音楽チャペル
29日(月)	A, ルスターホルツ(文学部宗教主事)	English Chapel
7月1日(水)	嶺重 淑(宗教主事)	「見えるものと見えないもの」
3日(金)	林 直也(社会起業学科教員)	出会い⑧
6日(月)	金 大賢(人間福祉研究科D1)	「夢を見る人」
8日(水)	榮 巖(神学研究科M2)	「善いこと？ 悪いこと？」
10日(金)	クラシックギタークラブ	音楽チャペル
13日(月)	松岡克尚(社会福祉学科教員)	出会い⑨
15日(水)	室田保夫(学部長)	春学期最終チャペル

日時	奨励者	主題
9月21日(月)	嶺重 淑(宗教主事)	「時を知る」
25日(金)	嶺重 淑(宗教主事)	「映像で見る関西学院の歴史」
28日(月)	創立記念チャペル	於) 中央講堂
30日(水)	筒井信行(四条暁教会牧師)	「神の御心ならば」
10月2日(金)	宗教総部献血実行委員会	秋の献血週間を覚えて
5日(月)	グリークラブ	創立記念日を覚えて
7日(水)	大隈省三(社会起業学科教員)	出合い⑩
9日(金)	上ヶ原ハピタット	活動報告
12日(月)	ゴスペルクワイア (POV)	音楽チャペル
14日(水)	小西砂千夫(社会起業学科教員)	「救われる者は少ない」
15日(木)	大学合同チャペル第1日	於) 中央講堂
16日(金)	大学合同チャペル第2日	於) 中央講堂
19日(月)	上ヶ原ハピタット	活動報告
21日(水)	嶺重 淑(宗教主事)	「そうになりたい自分とそうである自分」
23日(金)	広瀬康夫(吉岡記念館職員) & New Directions	音楽チャペル
26日(月)	梓川 一(社会福祉学科教員)	出合い⑪
28日(水)	嶺重 淑(宗教主事)	「宗教改革記念日を覚えて」
30日(金)	池埜 聡(社会福祉学科教員)	出合い⑫
11月6日(金)	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
9日(月)	大宮有博(名古屋学院大学教員)	「宗教の意味」
11日(水)	嶺重 淑(宗教主事)	「出合いと人生」
13日(金)	佐藤博信(人間科学科教員)	出合い⑬
16日(月)	三ツ本武仁(香里教会牧師)	「わたしの羊の世話をしなさい」
18日(水)	牧里毎治(社会起業学科教員)	出合い⑭
20日(金)	藤井美和(人間科学科教員)	出合い⑮
23日(月)	聖歌隊	音楽チャペル
25日(水)	岩本品子(教務補佐)	クランツ作り
27日(金)	宗教総部献血実行委員会	冬の献血週間を覚えて
30日(月)	嶺重 淑(宗教主事)	アドベントを覚えて
12月2日(水)	嶺重 淑(宗教主事)	クリスマス賛美歌練習
4日(金)	バロックアンサンブル	音楽チャペル
7日(月)	大学合同アドベントチャペル	於) 中央講堂
9日(水)	口笛&ゴスペル演奏	音楽チャペル
11日(金)	松隈 協(高等部宗教主事)	「一緒に下ってきて」
14日(月)	宗教総部献血実行委員会	活動報告
16日(水)	人間福祉クリスマス祝会	(下記参照)
18日(金)	中野陽子(英語科教員)	「人間福祉学部の英語の教科書」
21日(月)	嶺重 淑(宗教主事)	「静かなクリスマス」
23日(水)	人間福祉クリスマス礼拝	(下記参照)
	藤田浩喜(西宮中央教会牧師)	「光は暗闇の中で輝いている」
1月6日(水)	震災を覚えるチャペル	於) ランバス記念礼拝堂
8日(金)	室田保夫(学部長)	今年度最終チャペル

*上記の通り、2015年度は、春学期43回、秋学期41回、計84回（合同チャペルを含む）のチャペルアワーを実施した。出席者は例年以上に多く、特に各種音楽団体による音楽チャペルには毎回多数の出席者が見られた。奨励の多くは人間福祉学部の教員が担当したが、今年度は特に「出会い」という共通テーマを設定し、計15人の先生方にこの主題で奨励していただいた。来年度は今年度の反省を踏まえ、さらに充実したチャペルプログラムを提供できるよう努めていきたい。

※2015年度クリスマスチャペル報告

学部のクリスマスチャペルは例年と同様、クリスマス礼拝とクリスマス祝会を分けて実施し、クリスマス祝会を12月16日（水）の夕刻（18:30～20:20）に学生会館新館 OFF TIME で開催し、クリスマス礼拝は12月23日（水）の通常のチャペルアワーの時間帯（10:35-11:05）に実施し

た。クリスマス祝会では、最初に短く礼拝の時間を持ち、ハンドベルクワイアの演奏を聴いた後に「祝会」の部に移り、学部学生・教職員が軽食をともにいただきながら、混声合唱団エゴラドや口笛の演奏を聴き、サンタからのプレゼントに興じたりしながら、楽しいひとときを過ごすことができた。また、クリスマス礼拝は人間福祉学部チャペルで静かに守り、日本キリスト教会・西宮中央教会牧師の藤田浩喜先生より「光は暗闇の中で輝いている」という題で奨励して頂いた。

参加者はクリスマス祝会が100余名、クリスマス礼拝の出席者は約50名で、例年とほぼ同数であった。特に祝会については、会場の選定等、様々な課題もあるが、来年は今回の反省点を踏まえて、会場やプログラム内容等を今一度検討し、より親しみやすいものになるように工夫していきたい。

（嶺重 淑）

■人間福祉セミナー

人間福祉学部では、2013年12月に開催した現役生、卒業生、教員の交流を目的としたホームカミング的イベントである人間福祉セミナーを、今年度も「関西学院大人間福祉セミナー2015」として、2015年12月12日（土）の午後3時半から、G号館201号教室で開催した。人間福祉学部の専任教員のうち、2016年度をもって5名が、2017年度をもって2名が定年退職を迎える予定ということで、今年度のセミナーではその7名の教員に登壇していただき、パネルディスカッション「人間福祉学部の過去、現在、未来を語る」を実施し、125名の参加者と一緒に人間福祉学部への想いや期待を共有する機会を持った。具体的なプログラム内容は以下の通りであった。

15:30～15:45 開会挨拶

人間福祉学部学部長 室田保夫

15:45～17:25 パネルディスカッション

「人間福祉学部の過去、現在、未来を語る」

パネリスト：

室田保夫教授（社会福祉学科）

牧里毎治教授（社会起業学科）

才村純教授（人間科学科）

中塘二三生教授（人間科学科）

福居誠二教授（言語担当）

芝野松次郎教授（社会福祉学科）

小西加保留教授（社会福祉学科）

17:25～17:30 閉会挨拶

人間福祉学部次期学部長 大和三重

18:00～20:00 懇親会

於 新学生会館「OFF TIME」

室田学部長による冒頭の開会の挨拶の中では、創設から8年間の人間福祉学部のあゆみが説明されるとともに、元社会学部社会福祉学科の教員で本学部の創設準備や『人間福祉学研究』の初代編集委員長として本学部に多大な貢献をしていただいた浅野仁先生が2015年10月26日にご逝去されたことの報告があり、参加者全員により黙とうが捧げられた。

パネルディスカッションでは、7名の登壇者から設立時や着任時の想いや実際の教育・学部運営の中での思い出を語っていただいた後に、参加者からの質問にも答えていただき、最後に今後の学部への期待やメッセージを語っていただいた。こうした登壇者からの期待とメッセージを胸に、人

間福祉学部を今後も発展させていくよう教員が一致団結して取り組んでいくことが、人間福祉学部の次期学部長である大和三重先生による閉会の挨拶で語られ、セミナーの本プログラムは終了した。

『人間福祉研究』の現編集委員長である岡本民夫氏の乾杯で始まった懇親会にも、現役生21名を含む94名が参加し、世代を超えた交流が行われ、校歌「空の翼」の斉唱をもって20時に今年度のセミナーのすべてのプログラムが終了した。

次の人間福祉セミナーは学部創設10周年に

合わせて開催されることが、今年度のセミナーの中で明らかにされたが、セミナーは学部の公式行事であり、学部全体で現役生、卒業生、教員が交流し、お互いに学びあい、刺激を与えあうことができる唯一のプログラムである。次回のセミナーでは、学部の全教員が協働して取り組み、今まで以上に多くの卒業生や現役生に参加してもらえることを願っている。

(人間福祉セミナー実行委員会コンビナー

武田丈)



■外国人留学生懇談会

2015年度「外国人留学生懇談会」を開催

外国人留学生（学部・大学院）と教職員による「外国人留学生懇談会」（ランチミーティング）を2015年12月4日（金）・9日（水）の昼休みに開催しました。

昨年度までは夕刻に軽食やゲームなどを通して懇親を深めることを目的として実施していました

が、本年度は趣向を変え、昼食を交えながら、外国人留学生が日本での留学生生活をより充実したものと送ることができるように、日頃感じていることや学びについての思いなどをざっくばらんに教職員と話せる機会としました。

約30名の参加を得て、和やかな雰囲気の中で、様々な話題で盛り上がり、学生・教職員の双方にとって有意義なひとときとなりました。

(福居誠二)



■人間福祉学部優秀卒業研究賞「あじさい賞」

人間福祉学部では、故 浅野仁名誉教授の寄付により、優秀な卒業研究を執筆した学部学生の努力を称えるため、優秀卒業研究賞（通称「あじさい賞」）を設けています。

名前の由来は、あじさいを同氏が好まれたことによります。

最優秀賞・優秀賞には表彰状と副賞（図書カード 10,000 円）が贈られます。

2014 年度の受賞者は次のとおりです。

・最優秀賞

成田 千恵

終末期患者におけるリクエスト食と QOL の関係

－スピリチュアリティに焦点をあてて－

・優秀賞

山下 作土

就労継続支援事業所における、広汎性発達障害（PDD）のある人の就労支援の現状と課題

－事業所の職員に対するインタビューを通して－

史 興龍

中国農村部における医療保険制度と改革

－医療保障制度の健全化に向けて

胡 宝奇

日中両国の大学生の高齢者扶養意識に関する比較研究

－儒教文化思想を中心に－

上田結衣子

出生前診断に対する大学生の態度

－尺度開発と関連要因の検討－

向 由紀

介護度の差異が日常生活動作および身体組成に及ぼす影響

人間福祉学部優秀卒業研究賞規程

（目的）

第 1 条 学校法人関西学院は、浅野仁氏（本学名誉教授）よりの寄付金をもって、人間福祉学部優秀卒業研究賞を設定する。

2 この賞は、人間福祉学部学生の学習・研究意欲を高め、勉学の向上をはかることを目的とする。

（資格及び交付）

第 2 条 この賞は、毎年人間福祉学部において優秀な卒業論文等を執筆した学生に授与する。受賞者を毎年若干名とし、受賞者には賞状と副賞を授与する。

（所管及び運営）

第 3 条 人間福祉学部に優秀卒業研究賞（浅野賞）選考委員会を設け、受賞者の選考に当たる。

2 選考委員会の構成及び選考方法については別に定める。

（規程の改廃）

第 4 条 この規程の改廃は、選考委員会の議を経て、人間福祉学部教授会で決定し、理事会の承認を得るものとする。

附 則

この規程は、2011 年（平成 23 年）4 月 1 日から施行する。

[2014年度 人間福祉学部優秀卒業研究賞・最優秀賞 要旨]

終末期患者のリクエスト食と QOL の関係

—スピリチュアリティに焦点をあてて—

成田 千恵

1. 目的：私は「リクエスト食」の持つ力が、“生きること”や、人間の“スピリチュアリティ”に何らかの影響を与えているのではないかと考えた。そして、リクエスト食がスピリチュアリティ領域を満たす要因であることが明らかになれば、その結果として、終末期患者の全体的 QOL は向上すると考えた。それゆえ、リクエスト食が終末期患者の QOL 向上に影響を与えることを明らかにし、今後の終末期医療への貢献、特に「食」を通じたケアの可能性を探ることを目的として、研究を行った。

2. 問題の背景：病院食は、病気からの回復や健康の保持増進を目的とし、栄養面が考慮された、誤嚥しにくい形態であることが多い。しかし、治療の見込みのもてない終末期の患者様に、そのような食事を提供しても、栄養面以外のニーズを満たすことはできないのではないかと。一人ひとりの好みや価値観に合わせた個別性の高い食事の提供が求められるが、実際、食に関わる語りや、自己決定の背景にまで、耳を傾けてケアする人的・時間的ゆとりはなく、その実現は極めて困難という状況がある。しかし実際には、個別のニーズを満たす食事は必要とされている。

3. 定義：本研究において「終末期患者」とは、あらゆる治療をしても治癒が望めず、生命予後が6ヶ月以内と考えられる患者とする。「QOL」とは、人間の幸福感やニーズに対する満足感を表す主観的概念であり、身体的、精神的、社会的、スピリチュアル的の4つの領域からなるもの、「スピリチュアリティ」とは、生きるための存在の枠組みや自己同一性が失われた時に、自己・他者・大いなるものとの関係性を持ち、新たな「いのちのあり方」や「自己存在の意味」を見出すための人間に備わっている能力や価値観とする。

4. 文献レビュー：(1) 理論 ①マズロー (1972)

は、基本的欲求の階層図は、低次から高次の順に、生理的・安全・所属と愛・承認・自己実現の欲求があることを述べていた。②柏木 (1996) は、人間を全人的な存在として捉え、終末期患者は身体的痛みだけではなく、精神的・社会的・霊的痛みを併せ持っており、この4つは相互に関係しあっていると述べていた。(2) 実証研究 ①大塚、尾岸 (2011) は、3事例の患者の語りの分析を通して終末期における食の意味を示唆した。②吉田、藤井 (2007) は、食事満足度と QOL には関係があること、身体機能の低下と痛みが満足度を低下させることを示唆した。(3) 新たなスピリチュアリティ下位概念のカテゴリー化 竹田、太湯 (2006) と藤井、李、田崎 (2005) のまとめた下位概念を考察し、新たにカテゴリー化を試みた。その結果、スピリチュアリティを①『人生の意味・価値・実感』、②『人との関係性』、③『人を超えた関係性』、④『死について』の4つのカテゴリーにわけることができた。

5. 実証研究：①研究目的：リクエスト食が終末期患者の QOL 向上に影響を与えることを明らかにし、今後の“食”を通じたケアの可能性を探ること ②仮説：「リクエスト食の一連のプロセスは、終末期患者の QOL の構成概念であるスピリチュアリティの下位概念に正の影響を与える。」 ③調査方法：リクエスト食実施予定の終末期患者に、食前・食後の計2回、半構造化インタビューを行った。④分析と調査結果：患者の言葉をテキストデータ化し、意味ごとに分類しネーミングした。その結果、【食事に関すること】【人や環境に関すること】【自己に関すること】での大カテゴリーと、その下位カテゴリーが見出された。そして、仮説「リクエスト食」の一連のプロセスが、スピリチュアリティ下位概念に正の影響を与える」は検証された。また、「リクエスト食」がラ

ライフレビュー様の効果を果たしうることが示唆された。

6. 考察と提言：「リクエスト食」を通して得られた家族やスタッフとのコミュニケーションから“自分は大切にされている”また、“自分は一人ではない”という実感を得ることができたのではないか。そのような実感が、スピリチュアリティ下位概念に正の影響を与えていたのではないか。また、共に食事や記念撮影をした思い出は、家族のケアにも貢献することになるだろう。過去に思いを馳せる「リクエスト食」は、終末期患者が人

生の総決算をすることに、非常に有効な手段となりうるのではないか。以上の考察を経て、次の2点を提言したい。(1) 終末期患者の「食のケア」の重要性に対する理解を、より多くの人に広めることが大切なのではないか（例えば、今後の医療を担う看護学生に、終末期の「食」の重要性を伝える）。(2) 専門家が「食」にまつわるコミュニケーションを積極的に図ることで、終末期患者のライフレビューを促すことが可能になるのではないか。またそれは、終末期患者のスピリチュアルケアにも繋がってゆくだろう。